

日韓仏教信仰比較研究

——浄土思想を中心として——

はじめに

延塚知道

ここに掲載されている論文は、大谷大学と韓国の東国大学校との間の共同研究、「日韓仏教信仰比較研究——浄土思想を中心として——」の研究成果である。大谷大学では、真宗総合研究所の国際仏教研究班に所属し、一九九八年から三年にわたる間に、日本と韓国の研究者間で共同討議と共同研究を経て、執筆されたものである。東国大学校から、韓普光教授の「元暁の発菩提心正因説について」と李道業教授の「華嚴経における浄土思想」、大谷大学からは、鄭早苗教授の「壁画古墳からみた高句麗の宗教」の三論文である。研究員の一人であった延塚知道は、論文執筆年に大谷大学の文学部長を拝命したため、職務に忙殺されて論文を執筆できなかった。したがって、この日韓共同研究が生まれるまでの経緯と、この研究班に期待されている願いを記して、第一期の東国大学校との共同研究のまとめとし、またこれからも続くことになっているこの研究班の指針となればと願うことである。

この日韓共同研究が生まれることになった源は、一九九七年の大谷大学と東国大学校との学術協定にある。当時の訓覇暉雄学長と東国大学校の宋錫球総長との間で締結された学術協定書に基づくものである。その協定書の第一条に、「交流に関する諸活動は、次のとおりとする。」(1)教育・研究者の交流、(2)学生の交流、(3)共同研究並びにシンポジウムの開催、(4)学術文献・資料の交換、(5)両大学間で合意を得たその他の交流活動」とある。その(3)に基づいて計画されたも

のである。したがってこの研究班は協定校としての共同研究であるから、単に両校間で研究するにとどまらず、共同研究を通して、他の項目の実現にも資するものであることが期待されているのである。

また当時の両校の責任者間で協議をし両校で確認しあったことは、この学術協定に基づく研究班を本当に実質のある学術交流にしたいということであった。当時の日本の大学は、諸外国と学術協定を結び、協定校との間でシンポジウムや研究発表会等を開催するのが常であった。しかしそれには多くの研究者のための旅費、宿泊費さらには懇親会の費用と、膨大な経費を必要とするものであった。協定校との交流という点からいえば、それはそれなりに意味のあることである。しかし本来の「研究・学術の交流」という点からいえば、膨大な経費を必要とする割には、それほど実質のあるものではなかった。したがって何よりもまず実質のある学術交流がしたい、ということが両校で確認をされたことであった。そのためには、両校で研究者を2名ずつ選び、地道に研究と討議を重ねるなから研究成果を出して、それを積み重ねて将来はそれぞれの国で研究書として公にしよう、ということになった。さらに少ない人数の研究者の交流であったとしても、お互いの親密な交流によって、研究者としてのみならず、人間としても深い信頼と深い友情が生まれるに違いない。何度も共同研究の回を重ねる毎に、お互いの協定校を本当に信頼する人が生まれてくれば、必ずや将来は深い絆で結ばれる協定校に成長するであろう、ということが同時に願われたことであった。

ほぼ一年かかった事前の確かめのなから生まれてきたのが、一九九八年に発足を見た、真宗総合研究所のこの研究部会であった。大谷大学から、鄭、延塚、東国大学校から、韓、李の四名が研究員として指名された。初回の協定校としての共同研究であったために、将来をにらみながらどのような研究会にするかということから、討議を進め具体的な研究会のあり方を作っていくところから始めざるを得なかった。初年度には、大谷大学から一回訪韓し、東国大学校から一回訪日をして、討議を重ねた。その間に大きなテーマを「日韓仏教信仰比較研究——浄土思想を中心として——」とすることを決定し、さらにそれぞれの研究分担を決めることができた。その間に確認されたことは、この第一期の共同

研究が終わる年には、各自四〇〇字の原稿用紙で三〇枚程度の原稿を書き上げること。その原稿を、大谷大学では真宗総合研究所の『研究紀要』に発表すること。東国大学校では、同じ原稿を『仏教学報』に掲載することを確認した。さらにこの共同研究が続けられるならば、将来原稿を書物にして、両国で出版ができればということも話し合われた。

一九九九年には、初年度の研究計画に基づいて、日本の文部科学省に科研の申請書を提出した。しかし残念ながら採択には至らなかった。この年には大谷大学から一度訪韓し、科研の提出書類を確認し、各自の研究の進展状況、さらには資料の収集等を計った。また、二〇〇一年の八月までに、各自の原稿を提出することを確認した。

二〇〇〇年には、東国大学校側から施設見学を含めて訪日し、中国韓国日本へと伝来された仏教について、広く討議を重ねたことであった。またこの共同研究が、真宗総合研究所の国際仏教研究班としての最終年に当たるために、研究所の主事と国際研の実務担当者とわれわれ研究員とが訪韓し、この三年間にわたる研究会のあり方、さらに研究の実質性、また日韓という今後の仏教研究のあり方等々を話し合った。そこで話し合われた結論だけを言えば、東国大学校からは、たくさんの学術協定校があるが、大谷大学との共同研究が一番研究の実を伴うものであった。大谷大学からも、日韓の仏教研究はこれまでもあまり進んでいるとは思えないので、このままの研究体制を維持しながら、できるだけ長く続けていきたいと申し入れたことであった。

このような討議と研究を重ねて提出され、韓国の『仏教学報』に発表されたものが、今回の『研究紀要』に掲載されたものである。第一期の共同研究であり、手探りで進めてきたために、研究を始め全てのが遅々として進まず、紀要発表が今日まで延びたこと、さらに延塚は原稿作成にまで至らずにこの報告でそれにかえさして頂くことを深くお詫びする。

しかしわれわれは今回の共同研究で多くのことを学ばせて頂いた。まずは、曹溪宗を中心とする韓国の仏教事情と、多くの問題点。さらにそれを鏡として見えてきた日本の宗派仏教と世襲制の問題点など、予想外のことを数多く教えら

れた。さらに仏教大学としての東国大学校の運営の仕方をとおして、大谷大学のあり方もまた教えられるものは多かった。またこの研究会に直接関係することをいえば、以前協定を結んだ頃に多くの大学が行っていたシンポジウム等の学術交流は、今の大学の経済状況からほとんどが手詰まりになり、学術交流のあり方を根本的に見直さなければならなくなつたのである。その際最も有効であると思なされているモデルが、大谷大学と東国大学校との研究会であると教えられた。その意味でも是非この共同研究を続けたいとの東国大学校からの申し入れもあり、大谷大学としても今までの以上の研究成果を期待できるとして、小川一乗学長が二〇〇一年に学術協定をさらに更新したのである。

今年度から新たに東国大学校との共同研究が発足した。テーマは「仏教における信」である。韓国は曹溪宗であるため、浄土教の研究に絞ると研究者が限られてくる。したがってこれからは、新たに仏教に共通の重要な視点、たとえば「信」とか「本願」とか「行」とかというようなテーマを進めていきたいということである。大いに研究が進み研究書の出版にまでこぎ着けることを願うことである。